

赤ちゃんの声遊び? ● ひとり発声に耳を澄ます



赤ちゃんがひとりで、何だか楽しそうに(時には何だか大マジメに)、あうー、えうー、むー…って、声を出していること、ありませんか? あの声は、誰かを呼んでいるのでしょうか…案外、そうではないこともあるようです。ちょっと、観察してみました。

赤ちゃんに気づかれないよう、そーっと、赤ちゃんがひとりである様子をビデオで撮ってみます。すると、赤ちゃんが自分から、ふと、声を出し始めることがありました。たとえば、まだみんなが寝ている朝早くだったり、お昼寝から起きたときだったり、お風呂上がりだったり…。誰も返事をしないのに、泣き出しもせず、お気に入りの短いフレーズをえんえんとくりかえしたり、びっくりするような高い声を入り混ぜたり、いろいろな工夫を聴かせてくれました。まるで、自分の声で遊んでいるかのようです。ちょうど、お気に入りのおもちゃをためつすがめつするように、たまたま自分の声がお気に入りになって、ああしてみたり、こうしてみたり、一所懸命に遊んでいるのかもしれないね。赤ちゃんの遊びは、まわりや自分への探検だったり、何かの練習だったりするもの。「声遊び」も、すてきな声づくりへの第一歩、なのかもしれません。



うみかぜだより 2009.6.20 第3号



こんにちは!
「うみかぜだより」です♪♪♪

高谷清さん(びわこ学園医療福祉センター草津医師・前園長)から、「産声」についてちょっといい話、いや、かなりいい話をお聞きすることができました。

栗東トレーニングセンター(日本中央競馬会)にお勤めの知人の方に問い合わせたのですが、「馬の赤ちゃんは、生まれる時には『声を挙げない、鳴かない』そうです。出産後、子馬が自力で立ち上がり落ち着いてから、お母さんを探して鳴くのが最初だそうです。」とのこと。馬や牛の赤ちゃんは出生後、すぐに立ち上がり歩き始めます。これは良く知られたことですが、それでも立ち上がるまでには少しの時間がかかるようです。そして、その後、馬の赤ちゃんも「お母さんを探して鳴く」と知り驚きました。ただし、自力で立ち上がり、お母さんの後をしっかりついて歩くことができる状態になってから、のことなのです。

他方、霊長類の赤ちゃんは一般に運動能力は未熟なままで生まれて、出生後に長い時間、月日をかけて、自力で立ち、お母さんの後をついて歩く力を身につけていきます。だからこそ、なのでしょう。霊長類のお母さんは、生まれた赤ちゃんをすぐに抱き上げます。赤ちゃんがお母さんを探して鳴く(泣く)前に、しがみつかわが子を抱き上げてくれるのが霊長類のお母さんです。そして、お母さんから引き剥がされることがあったりしたとき、霊長類の赤ちゃんは激しく泣きます。

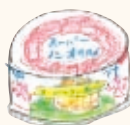
同じ霊長類とはいえ、人間の赤ちゃんはお母さんの身体のわりには大きく、重く生まれます。したがって、出産・出生は、母子双方にとって至難の営みです。疲れ果てたお

母さんは赤ちゃんをすぐに抱き上げることはできません。赤ちゃんはお母さん以外の人にひとまずは抱かれます。そこで、人間の赤ちゃんが出生時に上げる「産声」は、抱いてくれるはずのお母さんに「抱いて!」と求める声なのかもしれないと思えてきます。

馬や牛の赤ちゃんも「ここだよ」とお母さんに自分を知らせる声を上げるようです。しかし、お母さんが抱いてくれるわけではありません。たとえ、お母さんが見つけてくれても、自らついて歩かねばなりません。不用意に鳴くと捕食される危険もあります。そこで、自力で立ち、歩く力がつかないうちに鳴くことはないのでしょうか。

お母さんに抱かれていないとき、抱かれているとき、人間の赤ちゃんはよく泣きます。そしてまた、機嫌のよい声もよくでてくるようになります(本号「へえ～!?な話」)。やがて、歌やことばへ。赤ちゃんの声、その発達への興味はつきません。

お料理レシピ ● No.4 ツナ缶を使った料理3種



梅雨どき、外出も控えがち。便利なツナ缶を使った簡単お料理を紹介します
*分量は4人分です

ツナそば

材料

ツナ缶(80g) 2缶、しょうが汁 小さじ1、砂糖 大さじ1、みりん 大さじ1/2、しょうゆ 大さじ1

作り方

①ツナは汁をよくきり、細かくほぐす。
②鍋に、ほぐしたツナと他の材料を入れて火にかけ、汁気がとんでホロホロになるまで炒る。



▼冷蔵庫で4~5日はもちます。ご飯によく合います。おにぎりの具にもgood。

ツナディップ



材料

ツナ缶(80g) 2缶、たまねぎ 小1/3、マヨネーズ 大さじ4、レモン汁 小さじ1~2、塩・コショウ 少々

作り方

①ツナは汁をよくきり、細かくほぐす。玉ねぎはみじん切りにして水にさらす。
②①にマヨネーズ、レモン汁、塩、コショウを混ぜる。

▼冷蔵庫で2~3日はもちます。生野菜、パンによく合います。

ツナの落とし焼き

材料

ツナ缶(80g) 2缶、ねぎ 1/2本、ごま 大さじ1、卵1個、小麦粉 大さじ3、ツナ缶の汁 大さじ2、塩・コショウ 少々

作り方

①ツナは汁をよくきり、細かくほぐす。ねぎは小口切りにする。卵は溶きほぐす。
②ボールに①を入れ、小麦粉、缶の汁、塩、コショウ、ごまを加え、よくかき混ぜる。
③②を7~8ミリ厚さ、直径4~5センチの円形に形作る。
④熱したフライパンに油を薄くひき、③を両面色づくまで焼く。



▼好みに応じて、辛子、ケチャップ、ポン酢などいただけます。

うみかぜだより 第3号

発行 子育て応援ラボ「うみかぜ」(竹下秀子研究室) 彦根市八坂町2500 滋賀県立大学人間文化学部 tel.090-7343-2405 fax 0749-26-7235
編集 上野有理・嶋田容子・竹下秀子・広田幸子・丸澤由美子

おしらせ

学習会

と き 7月10日(金) 13:30~15:00
と ころ 滋賀県立大学交流センター2F研修室7・8

「発達障害ってなに??」をテーマに皆さんと交流したいと思います。「発達障害って耳にはするけれど、どうのこと?」「どうやって接すればいいの?」といった疑問を出し合い、「発達障害」への理解を深めていければと思っています。皆様のご参加をお待ちしております♪

連絡先/子育て応援ラボ「うみかぜ」 ● tel.090-7343-2405
● E-mail usp-umikaze@nifty.com ● URL http://umikaze.sub.jp/

ことばの発達

●わかるのが先、言えるのは後

お母さん、お父さん、身近な大人とのかかわりの中で、赤ちゃんは少しずつ「ことば」を育んでいきます。

8～9か月のころになると、赤ちゃんは、親のしている視線の方を見て親が何を見ているのか理解しようとしたりします。さらに、9～10か月ごろからは、自分の関心のあるものを指さすようになります。やがて、指さししながら、親の方を見て「アッ、アッ」と自分の気持ちを伝えようとします。このことを繰り返し体験しながら他者の関心のありかを理解したり、自分の興味のあるところを他者に伝えたりするようになっていきます。**出生直後から交わされていた双方向的なコミュニケーション**が、このころに一層しっかりしたものになっていくのですね。

そして、このころから、まずははじめに、ことばの意味を理解できるようになります。赤ちゃんが一



番早くわかるようになるのは、「マンマ」「プー」「ワンワン」などの名詞ではなく、大人と

のかかわりの中でいつも見て聞いている「(いないいない)ばあ」「ちょうだい」「だめ」「ばいばい」などのかかわりやあいさつのです。

つまり、**大人との毎日の生活の中で、繰り返されるかかわりやあいさつを見て聞いて、赤ちゃんはことばを身につけていくのですね。**毎日の生活の中で大人とのかかわりが「ことば」を育てるのに重要であることがわかります。食事、洗濯、買い物、掃除などの日々の生活のさまざまを、なるべく赤ちゃんと一緒に楽しく体験できればいいですね。

●大人が気をつけたいこと

赤ちゃんは意味はわかっていても、まだ、ことばでうまく言えません。赤ちゃんが何かを指さしていたら、まずは、赤ちゃんの指さしているものをいっしょに見てあげましょう。そして、何かを言いたそうにしていたら、赤ちゃんの気持ちを推し量って、代わりにことばにして言ってあげるといいでしょう。赤ちゃんは自分が関心をもっているものが何であるのか知りたいのかもしれませんが、ただ一緒に見てほしいだけかもしれません。また、どこかに行きたいのかもしれませんが、あるいは、何かをほしいのかもしれませんが……。何かを指さす赤ちゃんの気持ちは



さまざまですが、同じものを見る大人の気持ちとことばを重ね合わせることで、赤ちゃんには、自分を見守ってくれている大人の気持ちやことばへの関心が育っていきます。

赤ちゃんのことばの使い方が間違っている、間違いは自然と自分で直してゆきますので心配しないで。「それは間違っているよ」と訂正せずに、赤ちゃんが自分の気持ちをことばにして伝えようとしていることを大切にしましょう。赤ちゃんに自由に話させ、それを「うん、うん、そうだね」と肯定的に受けとめて聞いてやり、その後で、大人は正しいことばを繰り返し、はっきりと聞かせてあげればよいのです。たとえば「お靴が“切れた”の？ そうか、お靴が“脱げちゃった”んだね。じゃあ、履きましょね。」

赤ちゃんの自尊心を大切にあげましょう。

赤ちゃんが安心できるかかわりをして、ことばが育まれるのをゆったりと待ちましょう。そのような大人とのかかわりの中で、ことばが育っていきます。

また赤ちゃんは、テレビを見ながら画面の動きをまねたり、身振りしたりもしますが、ずっと一人で見てると受動的になってしまうようです。テレビは赤ちゃんの名前を呼びませし、一方的に画面が流れて、言葉の発達に不可欠な双方向的なかわりはしません。テレビの特性を知って、大人と赤ちゃんのかかわりを基本に、上手にテレビとおつきあいしていきたいですね。



●参考文献 『初めて出会う育児の百科』汐見悦幸・榎原洋一・中川信子(著)、小学館/『赤ちゃん学カフェVol.1』日本赤ちゃん学会編、ひとなる書房 『乳児の発達診断入門』田中昌人(著)、大月書店/『発達障害の早期支援—研究と実践を紡ぐ新しい地域連携—』大神英裕(著)、ミネルヴァ書房

子どもをぞうきんに見立て楽しむ、ふれあい遊びです。月齢が小さいお子さんは、身体中をトントンしたり、チクチクしたりすることで、とっても嬉しそうな顔をしめます。首や身体がしっかりしてきたら、刺激の強弱をつけたり、「ふきぞうじ」の部分で勢いよく床の上をすべらせたりすると、とっても喜び「もう1回!」と何度もおねだりしてきます。



いよいよ梅雨が始まったこの時期、室内で過ごすことも多くなると思います。お子さんと一緒にリズムにのって“ぞうきん”お掃除してみたいかがでしょうか?

♪♪ぞうきん♪

わらべうた

はりに いとを とおして チク チク チク チク ぬいまして
ぞうきんの できあがり ジャブ ジャブ ジャブ ジャブ あらって
しぼって しぼって ふきぞうじ



1 「はりに いとを とおして」で、お子さんの足の裏を指でトントンします。



2 「チク チク チク チク ぬいまして」で、お子さんの身体全体をチクチクします。「ぞうきんの できあがり」で、お子さんの身体をなでたり、さすったりします。



3 「ジャブ ジャブ ジャブ ジャブ あらって」で、お子さんの足を交互に屈伸させます。



4 「しぼってしぼって」で、お子さんの足を左右にクロスさせます。「ふきぞうじ」で、お子さんの身体をトントンしたり、床の上をすべらせたりします。

ふれあい遊び

世界の子育て タンザニア

タンザニアといえば……: 広大なサバンナで暮らすゾウやキリンなどの野生動物が有名。そんな東アフリカの国、タンザニアの人々の子育て事情を現地に滞在経験のある藤本麻里子さん(京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科)にご紹介いただきます。

抱っこ紐の起源?!

タンザニアの農村部でよく見かける光景が、赤ちゃんを背負って農作業や水汲みなど重労働をするお母さんたち。タンザニアではカンガと呼ばれる長方形の布で、赤ちゃんをおんぶします。これが、現在日本でもさまざまなものが販売されている”抱っこ紐”の起源と言われています。

お母さんがいっぱい?!

日本の少子化とは対照的に、タンザニアでは7人兄弟、8人兄弟なんて当たり前。一夫多妻という婚姻形態に起因する部分もありますが、兄弟姉妹が10人以上という例も珍しくはありません。そんなたくさんのお母さんをお母さんだけで世話するのは大変。そこで子育ての重要な役割を果たすのが年長の兄弟姉妹です。村の中では、まだ年端もいかない6、7歳の子どもがカンガで赤ちゃんを負っている姿をよくみかけます。小さいときから年下の兄弟の面倒を見ているタンザニアの子どもたちは、赤ちゃんの扱いがとも上手で、抱き方も板についています。

また、隣近所の人々も常に気にかけてあげています。家の中で赤ちゃんが一人で泣いている声を聞きつけると、「○○のお母さん、子どもが泣いているよ!」と大声で家族を呼びます。近くで作業していた家族はすぐ戻ってきて、赤ちゃんを抱き上げます。タンザニアでは、年長の兄弟、隣近所の人々、みんなが赤ちゃんを見守っています。まるでお母さんがたくさんいるようです。日本でも昔はこんな光景がよく見られたのでしょうか、今日では核家族化、地域社会の脆弱化で子育てがお母さん一人の負担になってしまいがちです。もう一度、お母さんがたくさんいるタンザニアのような子育てに立ち戻るときがきているのかもしれないですね。



弟を抱く9歳の少女(右)と12歳の兄(左)



カンガで子を抱く母親